

2017年度 新人歓迎合宿 事故報告書

文責：明坂

1. 事故概要

5月3～4日にかけて行った九重連山での新人歓迎合宿において

発生時刻：5月4日の10：30頃

発生場所：高塚山山頂から登山道沿いに5分程南下した位置

事故者：理学部物理学科1年 下鶴大輔

<事故発生時の状況>

8：30頃から疲労は見られたが、意識ははっきりしていた。風穴から高塚山への急坂も空身にさせることで歩行ができていたが、山頂付近での急坂に差し掛かったところで突然意識を失い倒れ込んだ。すぐに意識を戻したものの、その後すぐに再び意識を失った。

<事故後の処置>

一度目の意識喪失時には呼びかけに応答し、「寒い」と訴え、二度目の意識喪失時は呼びかけに応答しなかった。事故発生現場のすぐ先に少し広く平らな場所があり、そこにテントを建ててシュラフに入らせて様子を見た。11：00頃、低体温症も懸念して濡れた衣服を全て交換し、呼吸の楽な体勢にして、バーナーでテント内を温めた。

13：00頃、下鶴の意識が回復。フリーズドライのお汁粉を飲ませるとすぐに眠った。その後も目覚めて数分してから眠ることを繰り返す。起きたときには体調を確認した。

<救助隊への連絡>

当初はセルフレスキューも考えたが、下鶴の疲労の様子や登山道のガレ場などから難しいと判断し、救助隊を要請することにした。要請にあたり、健康なメンバーは計画通り先に下山させて警察へ連絡、明坂・池田・須賀の3名が下鶴の付き添いとして残ることとした。水や非常食、エッセンを下山するメンバーから少しずつ貰い、次の日の朝食も含め、少なくとも1日間はテントで待機できる準備をした。土屋を下山メンバーのリーダーとし、下山後速やかに警察へと連絡、疲労で倒れた要救助者が1名、健康な付き添いが3名いて、山頂付近に幕営しており、水や食料は充分ある旨を伝えてもらうよう指示した。また下鶴のご両親および山岳部長の熊丸先生にも上の内容を伝えてもらうこととした。

山頂付近であったため、携帯電話の電波が入る状態だった。14：20頃竹田警察署からの連絡を受け取り、テントにいる4名の氏名・連絡先を伝える。続いて竹田市消防本部からも連絡があり、同様の旨を伝える。山頂付近がガスで覆われているため、ヘリでの収容は不可能であり、救助隊を派遣することとなった。その後下山した土屋と、下鶴のご両親にもこちらから連絡し、状況の説明をした。ご両親も冷静に対応して下さり、円滑に状況を説明することができた。

救助隊は竹田市側からガラン台、風穴を經由して19:30頃にテントに到着した。下鶴の問診の後、ひとまず温かい食事を摂らせる。4名全員が下山することに決定し、テントを撤収して20:30に下降を開始した。風穴、ガラン台を經由して23:00に下降完了。ここから消防の車で下鶴の搬送先の大久保病院へと送っていただく。23:30過ぎに大久保病院に着き、下鶴は今晚から入院となった。救助としてはこれで完了である。

診断結果についてだが、直接的な原因となる異常は認められなかった。しかし今後も同様の症例が生じることも考えられるので、より詳しい診察を受けることを勧められた。点滴により体力も快復したため、11:30に退院。その後4名で帰路に就いた。

2. 計画概要

5月3日（水）

11:12 牧ノ戸口
13:15 久住山
14:00 中岳
15:30 坊ガツル

5月4日（木）

5:00 起床
6:00 行動開始
7:30 大船山
10:00 高塚山
14:30 白水鉦泉

5月5日（金）

7:30 起床
8:40 行動開始
9:18 所小野（1日1便）
10:21 小野駅

3. 行動記録

5月3日（水） 天気：晴れ→曇り

11:17 牧ノ戸口
12:45 星生山
13:25 久住山
14:20 中岳
16:20 坊ガツル

5月4日（木） 天気：雨→曇り

5：00 起床

6：15 出発

7：35 大船山

9：05 風穴

10：05 先頭高塚山着

10：30 事故発生

4. 省察

今回の事故発生の最大の要因は、上級生から1年生へのケアの不足である。行動開始時は1年生が上級生の間に入る形だったが、だんだんと隊列が変わり、先頭の後ろに1年生4人、続いて2年生、残りの3年生という形になってしまった。これにより細やかな体調のチェックが一切なされず、1年生も疲れを訴えにくい雰囲気になってしまった。1年生を上級生で挟む形を維持するように指示ができなかった3年生の責任である。

次にルートの把握ができていなかった点がある。初日は白口沢から坊ガツルへと降る予定であったが、この道が土石流の危険のために通行不可になっていることを把握できていなかった。そのため急ぎよ北千里浜から坊ガツルへと向かうことにし、行動時間が1時間余り伸びてしまった。また風穴から男池方面に降るルートもあったなか、それを思い浮かずに計画遂行に走ってしまった明坂の判断も悪かった。これらは計画の段階で調べておくルート状況、エスケープルートであり、これの下調べを怠った明坂の責任である。

また登山前の準備についても問題があった。上のルートの調査不足に加え、緊急連絡網を作成していない、登山届を提出していないという状況で、かつ計画書を印刷して所持しているのは1名だけであった。これにより、下山したメンバーが警察へと連絡先を伝えるのも滞ってしまった。九重程度なら大丈夫という甘い認識が部員全体にあったことは否めない。これは上級生全体の責任である。

以上の点が考えうる事故の原因である。最近の活動が無事に行なわれ、死者も出ていないことから、安全に対する意識が緩んできていることを感じた。以後は部員全体に事故防止を徹底させ、それについての知識も充実させていく所存である。

以上